Osaka University Knowledge Archive

Title	帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅 : 韓国語母語話者を対象として
Author(s)	金, 昴京
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59366
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【30】

氏　　名	金（キム）　昴京（ミョウキョン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２５３３８　号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅** **― 韓国語母語話者を対象として ―**
論文審査委員	（主査） 教　授　渋谷　勝己 （副査） 教　授　青木　直子　　准教授　高木　千恵

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、日本において日本語を第二言語として習得したあと韓国に帰国した、３名の、韓国語を母語とする帰国児童を対象に、統制談話と自由談話の２種類の談話をほぼ 24 ヶ月間にわたって縦断的に収集し、その身につけた日本語が摩滅するプロセスを明らかにすることを試みたものである。先行研究を整理し、また調査の概要をまとめた２つの章からなる導入部分と、具体的な言語事象を取り上げて摩滅の実態を詳細に分析し、その摩滅のプロセスをモデル化することを試みた５つの章からなる本論の、計７つの章より構成される。本文 99 頁および資料 22 頁、400 字詰原稿用紙に換算して約 350 枚の分量である。

第１章では、これまで行われてきた第二言語の摩滅をめぐる研究を、調査の対象、摩滅の要因、構築された仮説などの点から批判的に検討し、本研究の意義と立場を述べている。続く第２章では、本研究が採用した調査法（統制談話と自由談話の２種類の談話の収集、24 ヶ月にわたる縦断調査等）や調査協力者など、調査の概要がまとめられている。

続く第３章から第６章は、個別の言語事象に注目して、帰国児童の使用する日本語が摩滅する姿を詳細に分析したところである。まず第３章「流暢さの変化」では、帰国児童の発話の流暢さに現れた変化にスポットライトを当て、発話に現れたフィラー・反復・言い淀み・自己修正などに分析を加えている。その結果、第二言語の摩滅は、まずは情報処理能力に困難が生じ、発話に必要な言語項目を思い出すのに時間がかかるといったかたちではじまること、次いで、初期には時間をかければ思い出せていたものが、時間がたつにつれて時間をかけても思い出すことができなくなるという段階をふんで進むことなどを明らかにしている。続く第４章は、帰国児童の使用する日本語の語彙面に観察される摩滅のあり方を追ったところである。ここでは、日本語の発話を流暢に産出することができず、また時間をかけても意図する語が思い出せなくなった段階に至った帰国児童の日本語には、日本語では複数の語で区別して表すところをひとつの語で表現しようとする単純化、形式

上は日本語の語であっても対応する韓国語の語がもつ日本語とは異なった意味を表す形式として使用する転移、さらには韓国語の語をそのまま使用する混用といった事象が観察されることを指摘している。第５章は、助詞、とくに格助詞の「ニ」について、その摩滅のプロセスを分析したところである。第４章で見たような語彙面だけではなく、文法面でも、「シンデレラたちへ言う」のように「ニ」の代わりに「へ」を用いるなどの日本語の規則を単純化しているところのほか、「犬を会う」「船を乗る」「昔に（おじいさんがいた）」のような韓国語の影響を受けて変化した部分があることを見出している。第６章は、音声面での摩滅を分析したところである。音声面での摩滅は語彙や文法などにくらべて遅れるが、それでも帰国してからの時間が長くなると、単音レベルだけではなく、音素連鎖のレベルでも韓国語の影響が現れることを明らかにしている。

最後の第７章は、以上の分析結果をふまえて、摩滅のプロセスをモデル化しようとしたところである。ここでは、時間の経過にしたがって、帰国児童の使用する日本語の流暢さ、語彙、文法、音声の各側面にどのような変化がどのような順序で生じたか、本論文が明らかにした変化のプロセスを総合的に整理し、そのような変化をもたらした言語的要因として日本語の単純化と韓国語の影響があること、また摩滅に影響を与える言語外的要因として年齢や言語維持のための家庭での努力などがあること等があらためて確認されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国語を母語とし、第二言語として日本語を身につけた３名の帰国児童を対象として、これまで十分な研究の蓄積がなかった帰国後の日本語の摩滅のプロセスについて縦断的に分析することを試みたものである。これまでの第二言語の摩滅の研究は、英語圏からの帰国児童を対象とした英語の摩滅（あるいは維持）を取り上げた研究はあるものの、個々の特徴的な発話事例を紹介するタイプのものが多く、言語事象ごとに詳細に分析を加えたものは少なかった。また、ことばの摩滅を研究するためには個人を縦断的に調査することが必要であると言われながら、実施にあたってはさまざまな制約があり、あまり行われてこなかった。本論文は24ヶ月にわたって定期的に統制談話データと自然談話データの２種類のデータを収集し、帰国児童の使用する日本語に摩滅が観察される、流暢さ、語彙、文法、音声などの側面を丁寧に分析して、(a) 帰国児童の日本語の摩滅は流暢さといった運用面にまず観察されるようになること、(b) その後、語彙面や文法面に日本語の規則や特徴などの単純化や韓国語の影響が生じて摩滅が進行する様子が観察されること、(c) もっとも遅れて音声面でも韓国語の影響が顕著になること、などを明らかにすることに成功している。これらは今後のこの分野の発展のための貴重な見取り図を提供しているところであり、今後必ず参照されるべき重要な知見をもたらしたと言える。

ただし、本論文に問題がないわけではない。たとえば、言語の摩滅のプロセスを考えるためには、言語の能力（competence）、言語使用の自動化といった根本的な問題に正面から取り組む必要があるはずであるが、本論文では十分に議論されたとはいいがたい。また、インプットのあり方が摩滅のあり方を左右するといった言及が散見されるが、アウトプットあるいは広くインターアクションと摩滅の関係についても深く議論することが必要なところであった。その他、音声面での摩滅の分析にやや粗さが目立つ、摩滅のプロセスを描き出したモデルもナイーブなところがある、日本語母語話者を対象としてその英語の摩滅のプロセスを追究した研究が得た知見とのつきあわせがないなどの問題点もある。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、韓国語を母語とする帰国児童の日本語の摩滅のプロセスを縦断的に詳細に調査、分析し、その過程を一定程度明らかにした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって本論文は、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。